

日本大学工学部

校友会報

第 58 号

平成7年3月1日

目 次

ごあいさつ(工学部長、校友会長)	2
平成6年度(第37回)通常総会報告	3 ~ 4
第14回母校を訪ねる会の報告	5 ~ 7
支部総会・同窓会・クラス会	8 ~ 10
若葉マークがんばり記(大島一浩)	11
校友レポート(鈴木 清)	12 ~ 14
校友エッセイ(深谷敬一、渡部弘一)	15 ~ 16
日本大学工学部に望む(大高善兵衛)	17
工学部の入試制度(小野沢元久)	18
学窓発信1995(各科主任)	19 ~ 20
校友短信	21 ~ 22
計報	23
キャンパスミニメモ・事務局便り	24



日本大学工学部キャンパス

2号館屋上より東方向を望む、管理棟前を歩む学生諸君

図書館のモザイク、桜花に浮かぶ情報研究棟さらに情報工学科棟

そして、遠くに阿武隈の連山が見える。

ごあいさつ



日本大学工学部長

國分 欽智

校友の皆様、景気不況が長びいていますが、相変わらずお元気でご活躍のこととご推察申し上げます。昨今の経済界には幾分回復の兆しが見えてきたとも言われますので、今年はぜひ力強い立ち直りの年になってほしいと思います。

しかし大学を取り囲む環境は今後ますます厳しさを増し、5年後の21世紀には、いよいよ厳冬期に入ることになります。それは大学の学生収容定員が進学希望者を上回る時代の到来です。それでも、昨今、大学の新設は止まることを知らず、正にバブル崩壊の前夜をさえ予感させています。銀行、病院不倒の神話崩壊と同様に、大学も未体験の自由競争の時代に突入しました。このような大学大衆化の時代は、時代の変化に先行する教育機能の再構築と活性化、研究機能の充実と高度化の速さと深さが勝利者となるための要件です。これらの社会的変化に適確に対応すべく、これまでに進めてきた工学部の諸施策と改革については毎号で報告してきました。今後も教職員一同、工学部の発展に全力を尽くす決意です。

さて情報工学科の設置は平成8年度に完成しますので、平成9年度には大学院の博士前期課程に情報工学（仮称）専攻を新設すべく準備を進めています。また既設5専攻の定員を増し、それらの合計が学部1学年全定員の1割以上に当たる定員増の検討も始めました。これらの施策推進の理由は学部教育の個性重視、多様化、大衆化への改革とともに、研究機能の猶一層の充実と高度化が、自由競争下にある大学の社会評価を高める再重要な課題と考えるからです。次に平成10年以降の長・中期計画として、キャンパス再開発計画委員会から提出された答申書を基に、いよいよ再開発プランの作成を専門業者に委託することになりました。キャンパス南部の市の都市開発と区画整理が急ピッチで進められている現在、これらに整合する校地の再開発は緊急を要する事業となりました。プランは今年中に作成提出されますので、来年始めには21世紀指向の事業の展望が明確になってくると思います。工学部創立50周年に当たる平成9年度があらゆる意味で新世紀への力強い前進のスタートとなるように私達は懸命の努力を重ねてゆく決意です。どうぞ皆様よろしくお願い致します。それでは皆様の更なるご健勝を衷心より祈念申し上げ、ごあいさつと致します。



日本大学工学部校友会長

半沢 忠

平成7年の新春を迎え謹んで新年のご挨拶を申し上げます。平素は当会の運営などにつきまして深いご理解とご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

かく申しながらも心痛事は、このたびの阪神大震災であります。中でも物故された方々に対し衷心より哀悼の意を捧げます。またご遺族の方々には心よりお慰め申し上げます。そして、負傷された多数の方々には1日も早い快復をご祈念申し上げます。さらには、罹災された皆様にはこの不幸に負けることなく、どうか元の様な美しい町に再興されますよう念じております。

さて、去年は内外においてまさに変化の1年でありました。特に我が国は55年体制の崩壊という政治状況のもと所得税、住民税の特別減税などプラス面があったものの、円高に伴う国内産業の空洞化、製造業を中心とした内外価格差の拡大など経済、企業をめぐる環境が大きく変化しました。また、いわゆる価格破壊の進行で消費者の購売意識もこれまでにない変化を遂げ、企業側もその変化にいかに対応すべきか、努力を求められた極めて厳しい年であったと思えます。将来に目を転じると、一体今年はどうなるのでしょうか。経済企画庁などは昨年末から「景気は底を打ち、回復基調に乗った」と発表していますが、現実には急激な景気上昇は望めそうもないとの見方が多く、依然として経営環境を厳しくとらえ、慎重な経営が求められるものと思えます。一方母校工学部は時代の推移に敏感に反応し、大学の存続をかけて『特色ある大学』への脱皮に懸命な改革をすすめております。18才人口の減少、高学歴社会や生涯教育の要望などが、変革を要求しているのです。日本大学が昨年10月にオープンした総合学術情報センター「所沢」（日本大学100周年記念事業）は今後全学の絆を強める大きな力となり得るものと期待されております。本会では、常に会員に対するサービスはどうあるべきかを検討しておりますが、この総合学術情報センターが本格的に活動されますと、データベースなどを活用することによって研究開発、文献の検索、就職活動に役立つものと推測されます。その時には大いに利用したいものであります。我が校友会も来るべき21世紀に向かって、新しい道を拓き、新世紀に充分対応できるようにしなければなりません。私共役員一同は時代の認識を誤ることなく会務運営に精励致す所存でありますので今後とも一層のご支援ご指導の程お願い申し上げます。

平成6年度第37回通常総会報告

第37回通常総会は、平成6年5月14日(土)午後2時より、日本大学郡山研修会館において開催された。

総会は、司会を橋本事務局長(建10回)に委ね、先ず佐藤副会長(土6回)の開会のことばで始められた。次いで、半沢会長(化6回)より、旧年度の本会会務の運営が円滑に行われたことに対する感謝のことばや年度途中で郵便料金の大幅な値上げがあつて、支出増の止むなきに至つたこと、あるいは今後おとずれるであろう進学人口変動による大学への進学希望者の減少に対して、我が工学部は如何なる対応をすべきなのかを問い、その対策や指針についてのべられた。

次に、佐藤幸助氏(土3回)を議長に選出し、また議事録署名人には、野尻大五郎氏(化16回)、曾部忠義氏(電20回)、さらに書記には三浦昌雄氏(土14回)、蔭山寿一氏(建28回)がそれぞれ選出され、全会の承認を得て議事に入った。

報告第1号議案、平成5年度会務報告では、村田事業部長(土12回)より会員の状況すなわち正会員35,110名、準会員(在学生)4,885名との報告や本会財産の状況ならびに会務運営について詳細な報告があつた。

また補足して、橋本事務局長より、本会会則改正のため会則改正検討委員会を設けて鋭意検討中である

日本大学工学部校友会平成6年度通常総会



が、相当現実にそぐわない面があつて、委員の判断を仰ぐ部分が多く、文章化するまでに至らなかった旨の報告があり、今後の予定としては、明年度の総会に提案できるようにしたいとの意向が示された。審議の結果、全員の拍手をもって報告事項はすべて了承された。

承認第1号、平成5年度一般会計収支決算ならびに承認第2号、平成5年度特別会計収支決算について、



伊藤経理部長(電16回)より報告があり、これらに対する監査報告は石井和樹監査(土13回)によってなされた。審議の結果、拍手をもって承認された。

議案第1号、平成6年度事業計画について、村田事業部長より計画案が示された。これに対して、森谷信次氏(機19回)から、名簿作成などの点で、経済的に無駄のないように対応して欲しいとの要望などがあつた。審議の結果計画案は承認され、活動方針は決定した。

議案第2号、平成6年度一般会計収支予算案、同特別会計収支予算案については、伊藤経理部長が一括して提案し、説明をした。審議の結果異議なく、拍手をもって承認された。

次いで、会長から、会計監査委員の欠員補充について提案ならびに説明があつた。その結果、関根昭一氏(電2回)を選出し承認された。

日本大学工学部校友会会員各位

平成7年3月1日

日本大学工学部校友会会長 半沢 忠

平成7年度通常総会通知

日本大学工学部校友会平成7年度通常総会を下記のとおり開催いたします。皆様には、ご多用中とは存じますが、先輩後輩お誘いあわせの上、多数ご出席ください。

記

1. 日 時 平成7年4月22日(土)
午後1時より総会、同2時30分より懇親会
2. 場 所 日本大学郡山研修会館
所在地：郡山市愛宕町2-22
☎0249-23-4193
3. 総会・議題 (1)平成6年度会務および決算報告
(2)平成7年度事業計画および予算(案)審議

- (3)その他
4. その他
(1)総会終了後、引き続き同所において大学関係者を迎え懇親会を予定しています。
(2)研修会館宿泊希望の方は、5日前までに母校庶務課に申し込んでください。
☎0249-44-1300(代)

その後、校友会各支部から近況について報告があった。南から順に、九州支部、四国支部、東海支部、東京支部そして北海道支部と、それぞれ会員諸氏の活動状況や、各地の社会状況などについて各々語られた。

以上をもって、すべての議案についての審議は終了し、久野副会長（建21回）の閉会の辞とともに閉会した。その後引き続き同所にて懇親会を催した。日本大学本部からは、総長瀬在良男先生の代理として、常務理事梶原長雄先生にご出席戴きました。また工科校友会



会長吹上慎一先生、生産工学部校友会会長星雅之氏、さらには、工学部父母会会長神野寛氏などをお迎えして、和やかに、楽しい語らいの一時を過ごしました。校友の皆様には、親しく母校の空気を肌に感じる一時でもありました。

会は盛況裡にすすみ、定刻となり、来年の再会を約し校歌を斉唱して解散した。

歳出の続き

款項	種 目	予算額	予算現額	決算額	比較増減	付記
事務費	7 備品費	180,000	180,000	0	△ 180,000	
	8 印刷製本費	320,000	320,000	119,995	△ 200,005	
	9 通信運搬費	450,000	450,000	429,439	△ 20,561	
	10 修繕維持費	10,000	10,000	0	△ 10,000	
	11 光熱水費	40,000	40,000	30,000	△ 10,000	
	12 分担金	400,000	400,000	400,000	0	
	13 雑費	150,000	168,800	168,800	0	
	計	8,060,000	8,078,800	7,149,452	△ 929,348	
事業費	14 組織対策費	1,000,000	1,000,000	773,810	△ 226,190	
	15 会報発行費	4,000,000	4,798,090	4,798,090	0	
	16 会員管理費	2,800,000	2,669,457	2,232,202	△ 437,255	
	17 名簿作成費	400,000	400,000	399,518	△ 482	
	18 下宿対策費	10,000	10,000	8,566	△ 1,434	
	19 図書供与費	300,000	300,000	300,000	0	
	20 式典費	2,000,000	2,193,653	2,193,653	0	
	21 母校訪問費	400,000	400,000	288,254	△ 111,746	
	22 負担補助費	600,000	600,000	550,000	△ 50,000	
	計	11,510,000	12,371,200	11,544,093	△ 827,107	
会議費	23 総会費	700,000	700,000	634,550	△ 65,450	
	24 役員会費	250,000	250,000	205,906	△ 44,094	
	25 連絡協議会費	300,000	300,000	185,997	△ 114,003	
	26 旅費	900,000	900,000	834,760	△ 65,240	
	計	2,150,000	2,150,000	1,861,213	△ 288,787	
繰出金	27 職員退職給与積立金 特別会計繰出金	300,000	300,000	176,196	△ 123,804	
	計	300,000	300,000	176,196	△ 123,804	
積立金	28 積立金	11,000,000	11,000,000	11,000,000	0	
	計	11,000,000	11,000,000	11,000,000	0	
予備費	29 予備費	880,000	0	0	0	
	計	880,000	0	0	0	
	合 計	33,900,000	33,900,000	31,730,954	△ 2,169,046	

歳入額 38,207,842 円

歳出額 31,730,954 円

差引残額 6,476,888 円を翌年度へ繰越しとする。

財産の状況(平成6年3月31日現在)

単位 円

一般会計	引当財産	運用財産	合 計
6,476,888	3,779,640	33,381,718	43,638,246

平成5年度一般会計収支決算書

歳入 単位 円 △……減

款項	種 目	予算額	決算額	比較増減	付記
会費	1 終身会費	10,000,000	11,620,000	1,620,000	
	2 入会金	10,000,000	11,360,000	1,360,000	
	計	20,000,000	22,980,000	2,980,000	
繰越金	3 前年度繰越金	7,009,374	7,009,374	0	
	計	7,009,374	7,009,374	0	
繰入金	4 特別会計より繰入金	6,872,997	6,872,997	0	
	計	6,872,997	6,872,997	0	
雑入	5 預金利子	10,000	856,471	846,471	
	6 負担金	0	0	0	
	7 名簿代金	6,000	259,000	253,000	
	8 雑収入	1,629	230,000	228,371	
	計	17,629	1,345,471	1,327,842	
	合 計	33,900,000	38,207,842	4,307,842	

歳出

款項	種 目	予算額	予算現額	決算額	比較増減	付記
事務費	1 給料手当	4,450,000	4,450,000	4,282,099	△ 167,901	
	2 保険料	410,000	410,000	389,278	△ 20,722	
	3 交通費	700,000	700,000	637,000	△ 63,000	
	4 旅費	50,000	50,000	5,640	△ 44,360	
	5 交際費	600,000	600,000	528,250	△ 71,750	
	6 需用費	300,000	300,000	158,951	△ 141,049	

平成5年度職員退職給与特別会計収支決算書

歳入 単位 円 △……減

款項	種 目	予算額	決算額	比較増減	付記
繰越金	1 前年度繰越金	3,420,923	3,420,923	0	
	計	3,420,923	3,420,923	0	
繰入金	2 職員からの繰入金		75,504		
	一般会計より繰入金	300,000	176,196	△ 48,300	
	計	300,000	251,700	△ 48,300	
雑入	3 雑収入	9,077	107,017	97,940	
	計	9,077	107,017	97,940	
	合 計	3,730,000	3,779,640	49,640	

歳出

款項	種 目	予算額	予算現額	決算額	比較増減	付記
引当金	1 職員退職引当金	3,730,000	3,730,000	0	△ 3,730,000	
	計	3,730,000	3,730,000	0	△ 3,730,000	
	合 計	3,730,000	3,730,000	0	△ 3,730,000	

歳入額 3,779,640 円

歳出額 0 円

差引額 3,779,640 円を翌年度へ繰越しとする。

「母校を訪ねる会」第14回目を開催



平成6年10月22日(日)、第14回母校を訪ねる会が催されました。今回は第2回卒業生(昭和29年3月卒)と第22回卒業生(昭和49年3月卒)合計1,316名の方を招待致しました。第2回卒業生4名と第22回卒業生127

名の出席があり、昭和56年より始めた「母校を訪ねる会」の出席者の累計は1,356名となりました。なお、前日21日には5学科とも卒業して以来の初めてのクラス会が開かれました。

「平成6年度母校を訪ねる会」に参加して

永井良一

母校を訪ねる会の前日、土木工学科第22回卒業生同級会が開かれた。私は同級会に出席する前にソフトテニス部の練習を見学したいものと母校のテニスコートに足を運んだが、北桜祭なので、コートは一般に開放され沢山の人がいた。でもその中に数人の現部員を見つけ、思いがけず、懐かしいコートで気持ち良い汗を流すことができた。お陰で身も心も軽やかに同級会会場のホテル「プリシード郡山」に向かうことができた。

受付には、発起人でもある地元の同級生が待ちうけていた。20年ぶりの対面に、バット思い出す人、しばし時間のかかる人と様々であった。一口に20年とは申してもやはり時の流れを感じずにはいられない。こんな思いにかられながら、宴が始まれば、その空白を埋めるかのように、談笑の中にあるいは近況報告の声に、皆様々な分野で一生懸命活躍している姿が津波となって押し寄せてくるようでした。酒は気持ちを若返らせ、学生時代がつい昨日のように思えてきた。一次会だけでは飽き足らず、それぞれ思い思いのグループに分かれて、足は二次会へと進んだ。きっとこの夜は、皆ん

な心と頭は20代の若者になっていたであろうと思う。誠に素晴らしいことであった。翌日、早々に「母校を訪ねる会」へ参加した。友人達と学内を見学した。立派なキャンパスに驚き、この建物は何だろうか、などと話を弾ませ巡り歩いた。

母校を訪ねる会での学部長のご挨拶、また諸先生方の説明を伺いましたが、母校のソフト面ならびにハード面での充実発展には正に目を見張るものがありました。中でも女子学生の多さには驚きましたが、これも時代の流れなのでしょう。名残りは尽きなかったが、級友との再会を約して郡山を後にした。終りに、この有意義な会を催された、母校ならびに校友会そして同級会幹事の方々に対して心から感謝申し上げます。皆々様の健康とより一層のご活躍をお祈り致します。

(土木工学科22回卒 茨城県土木部)



「母校を訪ねる会」に参加して

阿 部 隆

何年か前から心待ちにしていた「母校を訪ねる会」に参加できる機会がやっと私達第22回卒の番になり期待と不安が入り交じった気持ちで郡山へと足を向けました。以前は、我が故郷徳島から約12時間もかかって郡山に着いたのに、今は高速艇、東北新幹線等ができたこともあり約9時間で行くことができ、最初から20年の時の長さを考えさせられる旅になりました。

東北新幹線に乗り郡山が近づくにつれ、気分はだんだん20年前の気持ちへタイムスリップして行き、昔の郡山の景色がまるで走馬灯の様にまぶたに浮かんで消え浮かんで消えていった。郡山の駅に降りた時にはすっかり学生気分になっていました。話には聞いて



「母校を訪ねる会」に参加して

植 田 一 博

校友会から見慣れた封書が届いた。開封してみると平成6年度の「母校を訪ねる会」への丁寧なる案内状であった。つらつらおもひに、日々の雑事に追われてあまり意識もなかったが、何と卒業してからもう20年の歳月が去っていたのです。すでに40歳を越した自分に改めて気が付いたのでした。

毎年一回送付される校友会報によれば、当該年度の卒業生の皆さんは、各科毎に「母校を訪ねる会」前日に同級会を開催しているとのことなので、私達も是非同級会を開きたいものだと思います。幸い私は郡山に居住していることでもあるから、一つここは幹事を務めてみようと思惟致しました。早速校友会事務局に連絡したところ、是非お願いしたいとのこと、更に連絡等に関しては最大限のご協力を致しますとのこと、話は円滑にすすみ、皆さんにご連絡申し上げた次第です。同級会には、幹事の欲張り、もう少し出席者がと思ったが、後から聞いたところでは、出席率は皆ほとんど同じだったようで、我が科だけの欲はすてることになりました。受付で待機していると、足早に満面笑を満えて近づいて来るのは、確かにまぎれもなく同級生なのだが、一瞬名前を思い出せない。

会では、ご招待申し上げた恩師の方々から、工学部

でしたが、郡山駅周辺の変貌ぶりには驚かされました。今の自分が「浦島太郎」になったようでこれから建築学科の同級会に出席するのが急に不安になり、皆が私を判ってくれるだろうか、また私が皆を分かるだろうか、そればかりを考えているうちに同級会会場に着いていました。しかし、その不安は会場に入るなり吹き飛んでしまいました。右を見ても左を見てもどこか昔の面影のある顔々々、皆オーオーと一度に昔話に花が咲き20年前の学生になっていました。そして一次会、二次会となつかしい学生時代の話とそれぞれ各方面で活躍中の近況報告と夜の更けるのも忘れ語り合い話がつきなかったが明日を思い止むなくホテルへ帰りました。

翌日は、「平成6年度母校を訪ねる会」に出席し、本館前でブラスバンドを聞き、校内をゆっくりと見学して廻りキャンパス内の移り変わりを見るにつけ、立派になったものと改めて感心した次第です。そして懇親会で昨日会えなかった級友とまた昔花に花を咲かせてまたの再会を約束し後髪を引かれる想いでキャンパスを後にしました。

最後にこの会を催して戴いた学部並びに校友会に対して感謝申し上げると共に、母校の発展と強く、遅しく、やさしさのある我が後輩が続出することを願い筆をおきます。ほんとうにありがとうございました。

(建築学科22回卒 (嵯岡田組))

の近況などを伺い、一時学生気分にはひたつた。引続き、出席者が身辺近況を語り、冷かしたり拍手をしたりそれはにぎやかなものでした。酔が回るともうまるで学生になりきっていました。同級会を開いてよかったとつくづく思いました。近くに居てもなかなか母校に向く機会がないものですから、翌日「母校を訪ねる会」に出席したときは、あまりの変り様に心底驚きました。ともあれ、やはり昔の友と会うのは嬉しい、また会いたいものです。このような機会をあたえて下さった工学部・校友会の皆様ありがとうございました。また、遠路ご多忙の折、私ども幹事の申すことをお聞き届き下さりありがとうございました。皆様には益々ご発展あらんことをお祈りいたします。

(機械工学科22回卒 郡山市役所)



「母校を訪ねる会」に参加して

梅 木 康 弘

平成6年度「母校を訪ねる会」は第2回卒の先輩方と第22回卒の校友を対象として開催されました。

正門より54号館へ入ると卒業以来初めて会う懐かしい顔々が、私達を快く迎えてくれました。

前日の同級会「電気科」には恩師松塚勇先生、本郷忠敬先生、松浦正博先生のご出席をいただき北は秋田県より、南は鹿児島県まで、総勢29名の出席者があり大盛況の内に終了したことを同級会の幹事岡谷君から聞きました。

キャンパスでは情報工学科の新設により、情報工学科棟と情報研究棟が竣工されていました。本館、図書館、桜並木とよく調和された情報工学科棟には、高性能のコンピューターや計測器類が数多く整えられ、21世紀を目前にして、6学科体制の工学部は大きく変貌し大学としての偉容を誇っていました。いよいよ「母校を訪ねる会」となり、国分学部長の挨拶に始まり各専任教授の紹介等があり早々と懇親会に移りました。20年の空間を埋める

ように名刺を交換して思い出話や近況報告をする者、写真撮影をする者等、互いに友情を温めつつ杯をあげました。母校を訪ねる会は10年目を節目に、同級会は是非東京でと話は弾みましたが、最後には幹事一任となり又の再会を約して郡山を後にしました。最後にこの会を開いていただきました学部・並びに校友会、同級会の幹事の方々に感謝申し上げますとともに母校の発展と皆様のご健康とご活躍をお祈りいたします。

(電気工学科22回卒 日本紙業㈱情報システム部)



「母校を訪ねる会」に参加して

三 浦 和 文

郡山駅を出ると小春日和の日差しが、私の目にまぶしく飛び込んできました。これは郡山に来る度に数度感じた体験で、東京ではあまり感じられぬ事です。

私は、今日(10月22日)、ある計画を持ってここ郡山へ来ました。

それは、お昼頃郡山に着き、下宿のあった所まで歩いて行く事、次に郡山ビューホテルアネックスで開かれる工業化学科第22回卒クラス会に出席する事、そして翌日は、卒業後20年を記念して開催される第14回「母校を訪ねる会」に出席する事です。

郡山駅からうすいの通りを抜けて、消防署の横を通り、荒池まで行ってびっくり、あの荒池が無いのです。池のほとんどが埋め立てられて水門の近くにわずかに水が残っているだけとなっていました。



更に先へ進み大通りに出て少し進むと、スーパーヨークベニマルがあり、その斜向かいの肉屋さんの前を通った時です。なんと昔懐かしいコロケを掲げる匂いが鼻をかすめたのです。「あ!この匂いだ。あ、そうだ。ベニマルやこの肉屋でよく買い物をしたのだ。そうするともう少し行くと郡山三中があり、道の左に土屋病院があって、その下の道路沿いに均ちゃんが居たなあ。」と思いながら進むと中学校と土屋病院が見えてきました。そうすると、私の下宿の清山荘(栄根三丁目)は、この道をまっすぐ進んだ坂の途中を右に曲がった所。それにしてもこんなに坂が多かったのでしょうか。

昔通っていた道も20年も経つとだいぶイメージが変わっています。栄根三丁目にも立派な家が立ち並び、昔のイメージはありませんでした。「ここだったのだろうか。」

同窓会会場のホテルに行くと、すでに今回の幹事である今泉君が大西君とロビーで待っていました。当日のホテルは、結婚式と私達の同窓会の他に電気工学科の同窓会もあり、ロビーはすでにいくつかの歓談の輪が作られていました。

今回は、卒業20周年記念の同窓会という事で、地元の今泉君の骨折りでクラス担当でありました武者先生と佐藤先生をお迎えし、20名の同窓生が各地から参加して、旧交を温める事が出来ました。

私達高分子研では、4年程前までは毎年数人が集まり同窓会を行っていましたが、その他の人は正に20年ぶりという人がほとんどで、最初は名前と顔が一致しなかったり、このような方が居たかしらと思う人も

いました。しかし宴も進み時間も経ち、会話ははずむに連れて、「そういえば彼は昔もあんな感じだったな。」などと若かりし日々を思い出す1時でした。

一次会が終わっても、ほとんどの人が二次会、三次会と流れ、私もホテルへ帰ったのは1時過ぎでした。

翌日、「母校を訪ねる会」に出席し驚いた事は、校舎が新しくなった事、正門からの通りがタイル舗装されて美しくなった事、通りの脇にあって、私たちが実験をした平屋の実験棟は壊され、新たに情報工学科棟、情報研究棟が立ち並んでいた事でした。さらに女子学生の数の多さには驚かされました。

「母校を訪ねる会」の式及び懇親会には、後藤先生、尾崎先生、武者先生、佐藤先生も御出席され、お話す事が出来ました。

懇親会を終えて、皆で工業化学科の実験棟へ行き、

実験棟の階段の前で出席者全員で、昔一年生の時に写真を撮り、自分達で現像した事を思い出して、記念写真を撮りました。その後で高分子研究室に集合。そこでは、再び思い出話が始まり、今だから言える、と言った話が続出、皆で昔を懐かしみながらお腹の底から笑い、楽しい一時を過ごす事が出来ました。

今回の同窓会は、クラス担当だけを招待したと言う事で他の研究室の先生方を御招待出来ず申し訳御座いませんでした。又、今泉君、幹事ご苦労さまでした。尚、高野先生、菊池先生の訃報に接し心より哀悼の意を申し上げます。

またの再会を祈願し、さらに先生方、皆様方、後輩諸君、そして日本大学の益々の御発展をお祈り致します。

(工業化学科22回卒 プラス・テク(機)技術研究所)

支部総会・同窓会・クラス会

東海支部総会を終えて

東海支部事務局 近藤 直 幸

第22回東海支部総会は、恒例の父母懇談会当日の去る7月12日名古屋市内ナゴヤキャッスルで開催した。校友会本部からは半沢会長が、大学からは父母懇談会にお出掛けいただいた先生方がご出席になられた。会長からは、校友会の近況などについて伺った。懇親会では、日本大学校歌のメロディーを会場に流しながら、先生や会長と共に酒をくみかわし、今日の大学について語り、学生時代や校友の近況についての話に花を咲かせた。最後は恒例の応援団OB、塗師一彦先輩(建17回)の音頭に合わせて校歌と応援歌を合唱し、また来年度の再会を約束しながら解散となりました。本年度は、4年ぶりに支部名簿を作成しご出席の会員に配布いたしました。役立てばと願っています。

主たる支部活動は、7月に支部総会、春と秋の年2回のゴルフコンペ、12月の忘年会などを予定しています。より一層親睦を深め、ヤング層も集える魅力ある会にしたいと思っています。新会員の皆様のご参集を心よりお待ちしております。

(土木工学科第28回卒 新晃コンサルタント(株))



平成6年度四国支部総会を終えて

四国支部長 北岡 保 之

四国支部総会は、湯水で給水制限の最中、去る7月23日高松市内わたや旅館で開催致しました。会には愛媛県からの校友も含め23名が出席し、支部活動を活発にするため、新会員の無料招待やゴルフコンペの開催、あるいは県単位の活動の充実などについて論じ合った懇親会では、半沢会長より大学の近況などについて報告があり、次いで、谷久顧問の乾杯の音頭で開宴となった。酔が回るなか、自己紹介、カラオケ大会、とすすみ、最後は恒例の「若きエンジニアの歌」「北心寮歌」「校歌」などを大合唱し、若き日々を過ごしたみちのくの地に想いを巡らし、会長差し入れの薄皮饅頭を懐かしみ、大いに盛り上がり無事終了致しました。そのまま二次会へと流れ、存分に旧交を温め、青春の感動を胸に、来年度の再会を約し解散した。



なお、初めてのゴルフコンペを11月20日平山正晴君(土24回)のお世話で、坂出CCで開催し、12名の参加で楽しみました。今後は、夏の総会と同時にコンペを開き、支部活動を盛んにしてまいりたいと存じます。

(工業化学科14回卒 高松市役所)

平成6年度北海道支部総会

支部長 松山 忠 壮

北海道支部総会は、去る7月15日札幌市内のホテルに於いて、約50名の校友が集い無事終了することが出来ました。引続き、校友会本部から半沢会長のご出席を戴き懇親会を催しました。恒例の行事とは申せ、1年間の積もる話でワイワイガヤガヤ、6～7月はビールが最も美味しい季節でビール樽は場内を行ったり、来たりで2時間半は、瞬時に過ぎてしまいました。終りに、日本大学校歌を斉唱し、万才三唱でお開きとなりました。今年の総会には、例年になく「若い世代の会員」の参加が多く、将来への夢を語ることができました。北海道支部も20年を過ぎましたが、まだまだ改善しなければならない点が多々あり、諸先輩ならびに校友会員の声に耳を傾け更に充実するよう努力する所存です。
(土木工学科14回卒 東急建設㈱)



北海道支部

支部長 松山忠壮(土14回) 東急建設㈱
事務局長 塩寺建治(土17回) 札幌市役所

東京支部

支部長 古村和夫(土3回) 古村建設㈱

東海支部

支部長 平野 卓(土3回)
事務局長 東京エンジニアリング㈱名古屋支社
河野 叶(土6回) 秋芳技研㈱

九州支部

支部長 湯村 筑後(建10回) 福岡県建築都市部
事務局長 今福 英充(建16回) ㈱イマフク

四国支部

支部長 北岡 保之(化14回) 高松市役所
事務局長 牧野 隆次(建22回) 牧野建築設計事務所

平成6年度 九州支部総会を終えて

九州支部長 湯村 筑 後

九州支部総会(アカシヤ会)は、去る10月21日、福岡市中央区天神の中華料理店「平和桜」(社長は日大OB)で、校友会本部より橋本寛事務局長をお迎えし、大きな盛り上がりの中無事終了いたしました。

まずは、校歌のバックメロディーの中、支部長の挨拶の後、平成5年度の事業報告、同じく平成5年度の会計決算報告等審議の上、満場一致で承認がなされました。次に、米資(橋本事務局長)の挨拶と、併せて学校の近況についての報告等をいただきました。各々卒業後、なかなか母校を訪ねる機会が少なく、毎年のことながら近況報告を受けるなかで、在学中のことなど思い出にひたりながら耳を傾けるといったところでした。

九州支部につきましては、「校友会(アカシヤ会)」として発足して14年余りを迎えました(それまでは、建築学科卒業生を主体にした集まりをやっていた)が、名簿上では、福岡地区だけでも約500名ほどになるようですが、我々九州支部役員としても情報把握と周知方に力不足があるのではと反省しているところです。

会員の動向と併せて、仕事関係も含めた情報交換の場として利用すべく毎月1回サロン形式で、任意の定例会を催しています。平均して、8～10名ほどが集まり、いろいろと歓談が深まるにつれ、ついゴルフの話が主体となってしまいますが、たのしくやっております。ゴルフの親睦会としては、年に2～3回で、3～4組ほどの参加となっております。

総会には、福岡地区が主体で40名の参加があり、なかには、遠く(県外)へ出張していたところを、大変便利(?)な携帯電話により、強制送還の命令を受けて、かけつけた方もあり、これらの方々には特別に大きな拍手で迎えながら、たのしいひとときを過ごすことができました。
(建築学科10回卒 福岡県庁)

事務局から

昭和33年5月、日本大学工学部校友会が発足して以来、年毎に会員の数は増え続け、平成6年度現在で35,120名の多きに達しました。本会では、会員各々の情報を会員各位に(会員以外は一切提供しない)迅速かつ正確に提供するため、情報管理を電算化しています。勤務先とか住所などに変更がありました時はご一報(本人申告のこと)下さい。会では、年3回のメンテを施し、確度の維持に努めております。また、支部活動、同級会、同窓会、コンペなどのときは、連絡用の住所ラベルなども都合することができますので、ご利用下さい。連絡先：日本大学工学部校友会事務局

☎0249-44-1327

工業化学科第31回卒業生無機第2研究室同窓会

斎藤 清

11月19日(出郡山市の「中華料理開成」で工業化学科31回生無機第2研究室の同窓会を開きました。7月2日に高木先生の退職記念パーティーが郡山で開かれた際に、久しぶりに同窓生6人と会い、「同窓会を開こう」という話になりました。まずは、無機2の研究室からということになり、今回の会が催されました。

当日は高木、吉川両先生をお招きし、同窓生は16人中7人が集まりました。高木先生は退職記念パーティーの記念品の仏足をあしらったオブジェを持参され、



このオブジェにまつわるお話をしていただきました。なお、この作品は先生から大学に寄贈されて、記念館に所蔵される予定だそうです。吉川先生からは、出生率が低いと、各大学とも運営に苦慮しており、工学部も偏差値的には中間に位置しているが、うかうかできないとお話がありました。

今回の同窓会は特別な企画など設けませんでした。皆の近況報告など、3時間余りを、穏やかで和やかにすごしました。昔の友や恩師との語らいは、多忙な私達に一時の休息と、活力を与えてくれました。次は工業化学科31回卒業生全体での同窓会を計画しています。(工業化学科31回卒、茅ヶ崎市消防本部)

北高「桜門会」のこと

高久田 稔

郡山市の北部富久山町に在る福島県立郡山北工業高等学校に勤務する工学部出身教職員の同窓会の名称を「桜門会」と名付けています。同校は、郡山工業高等学校と郡山西工業高等学校とが昭和52年に統合されて出来た高校です。全日制と定時制の2つのコースがあり全日制には、機械科3クラス、電気科は2、電子科は1、情報技術科も1、建築科も1、化学工学科は2の6学科10クラス(全学年30クラス1,200名定員)があり、定時制には定時制工業科1クラス(全学年160名定員)があります。教職員の人数は120名を超える県内有数の大規模校であります。平成7年度には、全日制的機械科の1クラスを転科し「環境システム科」を新設する予

定です。「桜門会」は例年5月に総会を開いているが、本年は5月14日市内「日光」で前年度の転退職会員ならびに新会員との歓送迎会をかねて開催した。参加者は23名を数え、青春時代を同じ学窓で過ごした共通の思い出が、年の差も感じさせず、何かと支えていただいたり助け合ったりして行けることは心強い限りであります。(電気工学科9回卒 郡山北工業高等学校)

機械工学科第12回卒業生クラス会

小山 泰

不定期ながら第4回目のクラス会を在京の有志の発起で、11月8日、房総のラ・コスタカントリーと富浦ロイヤルホテルで開催した。同級生は166名、北海道、岩手、名古屋、大阪など各地から29名と、懐かしい顔が揃いました。4月図書館長に就任された菅野先生を囲んで、秋の夜長を一時語り合う予定でしたが、都合がつかず欠席されました。しかし、母校で教鞭を執ることになった坂野進君が、工学部の近況について報告してくれました。また出席者からは、自慢話や苦労話一満の近況報告があり皆で一喜一憂の声々でした。

白髪薄毛も省みず、校歌、寮歌、エンジニアの歌など放歌三昧、再会を約し解散いたしました。

(機械工学科12回卒)



日本大学エベレスト登山隊を支援しよう

工学部校友会

日本大学山岳部では、創部70周年を記念して、エベレストの未踏ルート、北東稜からの登頂に挑む。平成7年2月21日カトマンズを経て入山する予定である。日本大学では、瀬在良男総長ならびに理事長を名誉顧問とし、戸村貞男桜門山岳会会長を委員長とするエベレスト登山隊実行委員会を結成した。また、古橋宏之兼日本オリンピック委員会会長を会長とする後援会も結成した。両委員会では、登頂の成功をめざし、募金を呼び掛けている。

①募金目標：85,000,000円

1口10,000円以上、免税措置が可能です。

②期日：平成7年9月30日まで

応募希望者には、趣意書、計画書、振込用紙を送付致します。



私が日本大学を卒業し、3年の月日がたちました。入社1年目は、てきばきと仕事をこなす先輩スタッフの姿に圧倒されるばかりでした。早く同じ様になりたいと、与えられた仕事を一生懸命こなしていた日々を思い出します。現在は半年先の目標を見つめて、日常業務を行う様になってきました。また個人的にはお陰様で家庭を持つことができ公私ともに充実した日々を送っております。こんな折、校友会事務局から、会報に近況等を寄稿して下さいとのご依頼を受けました。私は、ここ数年のあわただしい人生を記したいと思います。時間を追って、大学研究室の思い出、アメリカ留学、現在の会社を選んだ理由、会社の業務内容等の順に述べたいと思います。

私が就職をほんやり意識し始めたのは、大学2年の時でした。と申しても、具体的にどの様な業種を選ばよいかまでは考え及びませんでした。ただ一つだけ明確に意識していたのは、機械にはなくてはならない部品を作るメーカーであること。更にその部品に関しては、世界のトップクラスのメーカーであることでした。このようなことを考えていた時、青木教授が講義された水力学やトライボロジーを受講したのです。水力学の内容は水などの流体運動を力学的に講義されておりました。またトライボロジーは相互に運動している物体間の摩擦・摩耗に関する内容でした。先生がボードに、実際の現象と理論とが一致することを理路整然と講義されるのを聴くに従い、私はそのお話にどんどん引き込まれ、やがて数式の流れに静かな興奮を覚えたのでした。この時の流体や摩擦・摩耗に対する興味が、その後卒業研究で流体工学研究室（青木研究室）に入ることを決める理由となりました。青木研では「ラビリンスシールによるタービンの不安定振動」に関するテーマで卒研を行いました。これはタービンからの蒸気漏れを防ぐ部品にラビリンスシールがありますが時として、シール内の蒸気によりタービンが振動を起こすことがあります。その原因の追求と振動制御の研究を理論的に、同時に実験的に行うものでした。さて、研究もさることながら、研究室での思い出は青木先生、佐藤先生、竹内先生そして研究室のメンバーと酒を酌交わしながらのバーベキューを楽しんだことや猪苗代湖でのキャンプ等があります。

さて、大学院に進んで1年後、日本大学ならびに日本大学工学部のご配慮とお力添えにより留学制度の恩

恵を受けることができました。留学先はアメリカ、シカゴ市にあるノースウェスタン大学、そこには摩擦・摩耗に関しては世界的権威のHerbert.S.Cheng教授がおいでになり、私は同教授の下で勉強をいたしました。同室の研究生は日本精工社員の留学生を除いて全員が中国の方々でした。彼等は博士号を取るために日夜研究に励んでおりました。祖国を出帆し豊かな新天地アメリカでなんとしても成功したいという意気込みには驚かされました。この様なアメリカの研究室や大学の雰囲気、あるいはアメリカでの生活を一身に体験することができたのは、日本大学の留学制度のお陰でありまして、心より感謝しております。

帰国して1年後、日本精工を就職先を選んだ理由は「機械にはなくてはならない部品のメーカーであり、しかも世界に冠たる技術を有している」「流体の運動や摩擦・摩耗を制御する業種である」「留学先で日本精工の社員の方と知り合いになった」等3つの理由によるものです。正に日本精工のメッセージは「motion and control (運動と制御)」であり、自分の進むべき方向と合致すると感じました。日本精工は大正5年に創立され、現在は日本人1万人、外国人7千人の社員を擁しております。本社は東京大崎にあり、工場は国内8カ所、海外16カ所にあります。主な製品は、ベアリングボールねじ等の精機製品、シートベルト等の自動車部品、半導体製造等の電子機器の4分野に分かれております。私の仕事先は滋賀県石部工場です。当工場は自動車用ボールベアリングが中心であり、マニュアル車用クラッチベアリング・自動車車軸用ホイールベアリング等を生産しています。所属はプロダクションマネジメント室で海外工場で使用している部品の調査や、海外工場へ納品していただいている部品メーカーとの対応を主とした仕事をしています。学生時代は前期後期ごとに休息がありましたが、就職してしばらくは、次々と押し寄せてくる仕事にとまどいながら、どうして会社の仕事には区切りがないのかと吐息まじりに疑問を感じました。その時、マネージャーから「大島君、仕事はマラソンだよ」とアドバイスがありました。仕事は途中で止められないのです。一時期速くても遅くてもだめ、周りを見ながら着実に行わなければならないと考えております。

末筆ながら、母校の益々のご発展を祈念申し上げますと共に、校友の皆様のご活躍とご健勝とを心よりお祈り致します。

(機械工学科37回卒 工学研究科修士21回修了)

[日本企業の現状と将来]

<主として製造業の展望と国際貢献について>

鈴木清技術士事務所 技術士 鈴木 清

1. はじめに

所謂、バブル現象が崩壊して久しい。この度の不況と言われる現象は1991年の初め頃から始まり、既に3年余を経過している。当時を振り返り“夢よもう一度”と言う向きもあるが、現実には極めて厳しく期待とは裏腹に、一向に回復の基調が見えてこない。

この所海外へゆく機会も多く、友人達と話す機会も多いが、日本の不況感を彼等は容易に理解出来ない。

①日本の国際貿易収支（日銀調査）

歴 年	金額（百万\$）
1990(H2)	63,528
1991(H3)	103,044
1992(H4)	132,348
1993(H5)	141,514

②日本の完全失業率（総理府統計局調査）

歴 年	失業率（%）	失業率（万人）
1990(H2)	2.1	134
1991(H3)	2.1	136
1992(H4)	2.2	142
1993(H5)	2.5	166
1994.8(H6.8)	3.01	300
1994.9(H6.9)	2.98	201

③主要国の失業率

国 名	調査時期	失業率（%）
仏 国	1994.7	12.6
カナダ	1994.9	10.3
豪 州	1994.9	9.5
西 独	1994.9	9.2
英 国	1994.9	9.1
米 国	1994.9	5.9

（国連、IMF、ILO、OECD、経企庁、日銀等の調査）

その多くは日本の脅威的な発展を眼のあたりにし、憧れと恐怖と言う複雑な気持ちで見ているのである。

今日その多くは力を蓄え、日本より学ぶものは無いとまで言い切る国すら出てきている。

この事は日本に対する“エコノミックアニマル”か

らの脱却と、相手国の立場と視点に立った協力の要請と理解すべきであろう。

我が国の海外発展は1980年代後半から伸展し、最近では国内空洞化が問題になってきている。

今日では大手・中小企業を問わず、低コスト圏域を目指し、怒濤の如く雪崩れ込む様は凄じい。

①主要国の時間当たり労働コスト

国 名	調査年度	労働コスト(\$/H)
西 独	1994	24.9
日 本	1994	16.9
米 国	1994	16.4
仏 国	1994	16.3
英 国	1994	14.4
韓 国	1994	4.9
香 港	1994	4.2
中 国	1994	0.5

（米国ファイナンシャルタイムズ社の調査による）

②主地域の実質GDP成長率

地域区分	年 度 （単位%）		
	1993	1994	1995
N I E S	5.5	6.3	6.2
中 国	13.2	10.0	9.6
A S E A N	6.3	6.9	7.2
南 A S I A	4.9	5.5	5.9
発展途上国	6.9	6.8	7.0
日 本	0.1	1.6	3.0
先進諸国	0.3	1.7	2.9

（A）国連アジア太平洋経済社会委員会調査

（B）日本と中国は実質GNP成長率

（C）1993年は実績見込、1994、1995は見通し

当方にとってはサバイバルな戦略展開であっても、相手国は必ずしも全て歓迎する訳にはいかない。

又一方各国の経済成長率をみても、その格差は何れ縮小する傾向にある事は理解できよう。

宿命的に資源の乏しい日本が、今後国際社会の中で従来にも増して、更なる発展を期する為の“在り様”は如何なるものか、今將に問われていると言えよう。

2. 海外企業について

海外企業と言っても、地域やその国の事情で一概に言う事は難しい。そこで特に中国、台湾、韓国等身近な国を主体に触れてみたい。

◇ 中国（中華人民共和国）は歴史も規模も膨大な国であり、仕事を通しての感想は大人と言う事である。

近年は経済特区や市場経済の導入等で、先のGDP成長率でも述べた通り、その群を抜く成長・発展振りは眼を見張るものがある。

彼の国とはプラント輸出で何回か往来を重ね、種々と困惑したり、一喜一憂したり、困窮したり、或いは多くを学ぶ等々、貴重な経験を持っている。

技術移転が基本にあり、限られた予算と期間の中で如何に迅速、且つ的確に進め得るかは、プロジェクトメンバーの根性と質にかかっている。

又、契約条件をクリアーする為には対象の全設備、即ち日本で設計製作し持ち込んだ全設備を駆使し、相手国従業員の作業を通して、具体的に実証（実現）して見せ、了解を得ることが前提条件である。

事後談になるが、あるケースでは数か月経った後も要求する品質水準がクリアー出来ず、最高責任者以下幹部を日本国内へ呼び、再教育を行った経験もある。



左端が筆者

◇ 台湾の場合は今日国交がない為、外務省及び通産省の外郭団体である“交流会”等を窓口としての指導と言う事になる。

経営指導や工場運営・改革等は当該企業の秘密事項のため詳細は説明でき兼ねるが、企業間の競争が熾烈さを増しており、従来の経営体質や戦略では生残れなくなってきた事は、日本企業と共通するものがある。

台湾は非常に親日的で、日本の経営手法や管理手法をよく理解し、実践に活かしていると言えよう。

以前に長いこと米国の指導を受け、設備や試験装置には眼を見張るものがある。実際に活用しているかは定かでない。

企業の概要説明は全て英語であり、実際の指導では米国大学卒の工学博士に数多くお目にかかった。

これは後に説明する韓国企業にも見られる現象で、同種の企業幹部に結構お目にかかっている。



◇ 韓国の場合は日本の初期と同様に、当初は国家の選抜試験でパスした、エリート（約10名）を米国・独国・日本の3組に分けて留学させた経緯がある。

現在、本制度は中止されている様だが、これ等の人々が今日では大手企業の経営トップ層を形成している。

この国の経営者も経営幹部も、現在は企業の改革に真剣に取り組んでいる。

世界のハイテクショーや設備機械の研究・開発の成果発表・展示会に於ける、彼等の真剣な眼指しをご覧の方も数多いことと推察する。

国内企業との直接比較は適切でないが、研究熱心さと真剣さでは日本企業（特に中小企業）はいささか見劣りがする感を禁じ得ない。

幾つかの部門（業界）で日本企業を凌いでいることは、先刻ご承知の通りであろう。

参考までに最も多く対象となる指導テーマ（先方の要請）は次の様である。（具体的内容は御容赦願う）

- | | |
|----------------|-------|
| ①生産性向上対策に関する事項 | (34%) |
| ②経営改革・戦略に関する事項 | (29%) |
| ③研究・開発技術に関する事項 | (15%) |
| ④品質保証・管理に関する事項 | (12%) |
| ⑤組織人事・教育に関する事項 | (7%) |
| ⑥その他 | (3%) |

等々で、決定した事項や提言事項は、迅速に具体化し実行に移すアクションは極めてスピーディである。



3. 日本企業の経営課題

◇ 日本企業の海外シフトについて

生産性そのものは比較的高い様に見えるが、時間当り生産性の値は(業種によっても異なるが)、概して米国の凡そ60~70%程度であろう。農業等に関しては、先刻マスコミ等でご存知の通りである。

我が国の労働コストについては前述の通りで、ほぼ世界のトップレベルにあり、更に急激な円高要因等が加わり、国内企業の海外シフトに拍車がかかっている。

自ら国内で生産するものが限定され、海外へと進出していく訳で、特に成熟化製品や量産製品などがそのターゲットとなっている。

しかし、この現象は憂慮するだけでなく、必然の流れとして捉え対処する事が必要であろう。

日本企業が進出することによるメリットは、非常に大きいものがある。即ち、進出した国又は地域の技術力や経済環境が大きく改善され、消費・購買力の向上となり、グローバルな好循環系が期待できると考えるべきであろう。

又一方、海外展開が不可能な領域(製品)があり、高生産性を維持し乍ら生産可能な企業があれば、今後一層の発展が期待される。

◇ 産業空洞化への戦略について

産業の空洞化が叫ばれて久しいが、現在日本全体の海外生産依存率は数%と言われている。この同じ値が米国では20数%と言われている。

先般政府機関の調査では、現在海外シフトを実施中の企業では今後更にそのウェイトを上げ、10数%まで伸展する計画である事が知られている。

コスト高の国内では生産を全廃し、全て海外生産に依存すると言う企業も出現しているが、極端な例は別としても、本格的な対策が望まれる所である。

産業空洞化対策と言っても、特効薬がある訳ではない。例えば

(1) 成熟化した製品(或いは量産品)は、海外生産に依存する(水平又は垂直分業)。

◇ キーワードは相手国と一体となり、相手の為に、相手の視点で考え展開する

◇ 労働集約型製品の生産拠点を移転すれば、相互にメリットが大きい

◇ 成熟化製品の移転で、国内産業の活性化が更に推進される

(2) 国内産業構造(企業体質)の改革。

◇ 経営者に戦略的なビジョンがあるか

◇ 経営者が不退転の決意で陣頭指揮

◇ 在来の延長線上に改革はあり得ない
(過去の栄光はキッパリと捨てきる)

(3) 企業のハイテク化が重要である。

◇ 日本企業の電算化率は米国の95%に対し僅かに25%と言われる

◇ 導入電算機のネットワーク化に至っては、前者の50%に対し日本は3%に過ぎない

4. 日本企業の将来に期待

(1) 日本企業の殆どは再三に亘る危機を克服し、その都度世界のリーダーとして蘇ってきた。

(2) 最近の特徴として、大企業と中小企業との間に変革が起きている。

◇ パートナーとして開発型(情報発信型)企業(高い開発技術力)を優先的に選択する

◇ パートナーとして特異性(差別化)のある企業を優先して選択する

他国や他社にない特異性が特にサバイバル時代には強力な武器となる。

(3) 発展する企業の条件。

◇ 経営基盤に中・長期経営戦略がある(経営)

◇ 市場のニーズを先取りする情報収集力(営業)

◇ 市場に密着した独創的な開発技術力(技術)

先般、国分工学部長のこれからの大学経営と改革についてのお話を伺って、企業も大学も厳しい環境下にある事を痛感した次第です。ご健闘をお祈りします。

(電気工学科2回卒)

企業診断/経営指導/工場管理/教育・訓練

鈴木清技術士事務所

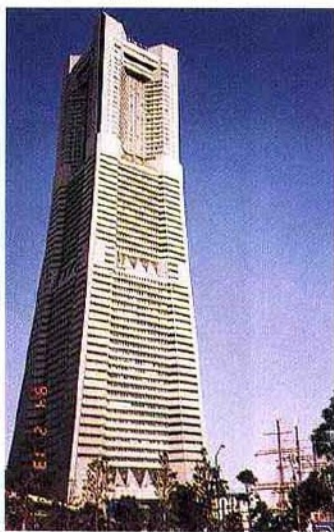
技術士 鈴木 清(電気工学科第2回卒業)

文化開化発祥の地「ヨコハマ」にまた一つの名所が出現しました。その名は、JR、東横線、市営地下鉄「桜木町駅」より徒歩3分の横浜みなとみらい21地区に平成5年7月16日オープンした高さ296mの超高層複合ビル「横浜ランドマークタワー」(以降、横浜LMT)です。TVのニュースなどで世界一早い展望用エレベーター(三菱電機製)分速750mのかご内で10円玉を立てたまま運転しながら69階展望階まで10円玉が倒れなかったほど乗り心地が良いと報道されたことは記憶されていることと思います。高さ296mは今まで日本一であった東京都新庁舎ビルを約53m上回り地上70階プラス塔屋3階の73階です。

「横浜みなとみらい21地区」(以降、MM21地区)とは、昭和40年に横浜市が三菱重工横浜造船所移転後の跡地の再開発として掲げたプロジェクトで西暦2000年には就業人口19万人、居住人口1万人の新しい街を誕生させることです。その街づくりは

- (1) 24時間活動する国際文化都市
 - (2) 21世紀の高度情報化社会に対応する情報都市
 - (3) 水と緑と歴史に囲まれた人間環境都市
- という都市像を持って進められて来ており、昭和63年に横浜美術館が開館、平成元年にパシフィコ横浜のオープン。平成5年7月に横浜LMT、横浜銀行本店が竣工。平成6年4月横浜国際会議場、5月に三菱重工本社が竣工MM21地区は都市としての機能を充実させ、賑わいを増してきています。横浜LMTはMM21地区で街づくりの先導的役割を果たしてきています。

ここで横浜LMTの概要を見てみると、オフィス・ホテル・ショッピングモール・イベントスペースなど多用途な複合ビルで建物はタワー棟(高層部分)プラザ棟(低層部分)に分かれ、タワー棟にはオフィス(1~48F)とホテル宿泊機能(49~70F:横浜ロイヤルパークホテル・ニッコー)が、プラザ棟には商業施設(1~5F:ランドマークプラザ)を中心に文化施設(5F:ランドマークホール)アスレチッククラブ(5F:リーヴルネサンス横浜)ホテル宴会機能(1~5F)などの施設があります。イベントスペースの中に「みなとまち」横浜文化の歴史を後世に伝える旧横浜船渠第2号ドックをイベント広場として復元した施設「ドックヤードガーデン」もあります。



プラザ棟巡回中の筆者

69階高さ273mにある展望階「スカイガーデン」からの眺めは80kmかなたの筑波山や伊豆大島を望むことができます。

建築概要(第一期)は次の通りです。

所在地	横浜市西区みなとみらい二丁目2-1
敷地面積	38.061㎡
延床面積	388,201㎡
構造	鉄骨造・鉄骨鉄筋コンクリート造 (一部鉄筋コンクリート造)
階数	タワー棟地下3階・地上70階・塔屋3階(最高高さ296m) プラザ棟地下3階・地上5階一部8階
着工	平成2年3月20日
竣工	平成5年7月14日
建築主	三菱地所株式会社
基本構想及びデザインコンサルタント	ヒュー・スタビンス氏及びザ・スタビンス・アソシエイツ(米国)

設計・監理 三菱地所株式会社

このビルには世界一・日本一が多数あります。特に建築設備については各種専門分野で論議ならびに発表されている通りですが、その中で特に顕著なものとしては、建築工法・空調設備・給排水設備・ビル管理システムと防災・防犯設備・電気設備・昇降機設備・制振装置・ゴンドラ設備・ごみ真空搬送設備などがあります。私は設備保全を担当し各設備の機能保持を日夜行っておりますが、超高層インテリジェントの設備は多用途に渡っており、従来の人のみのサービスでは限界ありと考え電子機器活用によるサービスの構築に頭を悩ませている今日このごろです。

(電気工学科13回卒)

機械工学科 渡部 弘一

私は昨年8月から3カ月間、日本大学海外派遣研究員を命ぜられ、欧米先進国7カ国の5大学と7研究機関を訪問することができました。目的は、海外における動力供給のための自然エネルギーの利用と開発研究状況の調査で、専門的内容については工学部学術研究報告会、日本大学海外出張報告書、工学部広報等に報告しましたので、ここでは海外回想録として述べたいと思います。これまで海外渡航は4回ほど経験していますが、主に欧米における国際会議での研究発表のため、その度に開催国にある主要研究機関を訪問することができ、多くのCommunicationを得てまいりました。この機会を最初に与えてくださったのは一にも二にも一色尚次教授で、今回の出張の際の訪問先のアポイントも数多く得られ、大変有意義なConnectionを得ることができました。訪れた都市の数は39都市、航空機搭乗数12回、鉄道乗車数22回、フェリー船乗船6回、高速道路走行3回、その他バス、地下鉄、トラム等は数え切れないほどでした。アポイント先でのPresentationと訪問を終えた後の余暇の日ではできるだけ一日乗車券を利用し、街の人々に出会う機会を持つことにし、各地でいろいろな人々との出会いを残してきました。

欧米の人々はその土地に生活しているという実感が漲っており、深い歴史と芸術の融和を醸し出していました。それは反面、人々一人一人が自分の身を守ることに徹底しており、いわゆる個人主義的でもあります。これは多種多様な人種や宗教の交錯する中で繰り返された戦争による試練の現れであり、一方日本の場合、単一民族で争いは少ない中で、むしろ天変地異により繰り返された災害による試練の結果との違いであろうと考えます。今年のはじめの阪神大震災の国内外の対応にもそれが現れていることが感ぜられるでしょう。

欧米人は自己主張が活発で決断力が速く、日本人は集団決議優先で結束力が固い点にそれぞれ得失があることなどを、Niceで出会った親日家で故画家の老末亡人との人生の話を聞かされたのを思い出します。

今年度からある日本の大手の企業は、大学卒の就職の条件に英会話ができることを打ち出してきました。そして、Reengineering (BPR) の展開とますます国際人を求められる中で、経済大国にのし上がった日本の本当の力を試されつつあります。そのような状況下で、新エネルギーについても欧米では政府の行政はもとより、専門家の弛まない研究開発の歴史を継承し、庶民の生活の中にエネルギー節減の習慣を浸透させていました。庶民は生きるために働き、食べるために耕す、衣食住が主体でありますから、自然の流れに逆らわない営みが基本であり、特別に省エネに拘っているわけ

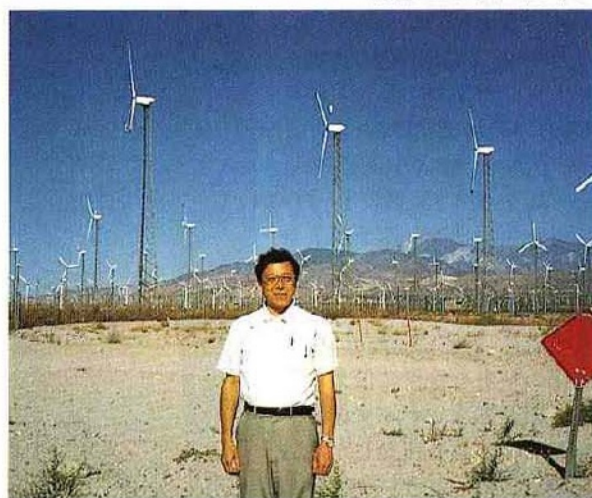
もなく、贅沢の装いなど微塵も見られません。

そこで新エネルギー利用に関して訪問国中で一番Impressionを受けた国は寒冷地のスウェーデンで、昔からエネルギー政策は変わらず、自然を壊さない水力発電の増強と、最近ヒートポンプ利用による省エネ暖房策、熱損失に厳格な建築基準等、質素でかつ地道な政策の中で国民が生活を営んでいました。それとは対照的に二番目に強いImpactを受けた国は、やはり米国で、石油エネルギーの利用はますます消費に走り、国内線旅客機の増便やMineralwaterと同じ値段のガソリンで走る大排気量自動車など、他の国とは比較にならないほどの消費大国でありました。しかし反面、自然エネルギー利用のための研究開発も大規模に行われており、10MWの出力を有する風力発電群の実稼働状況やバイオマス利用の非エネルギーサイクル実験村、都市の排水利用によるメタンガス生成とそれによるタービン発電、砂漠でのソーラー発電等々、将来のエネルギー不足の対策に万全の準備をしつつありました。この矛盾含みのグローバルな見地の中に、大国米国はどうしても軍事的政策を拭いきれないところが世界のリーダーの現実のようです。欧米を早速ながら巡ってきた実感では、エネルギーの消費に対して豊富なエネルギー使用国として日本も否めないでしょう。

そこで、校友のみなさん、日本の国民の衣食住の現状をもう一度顧みてはいかがでしょうか。これからの日本の行く末は、もちろん政府の行政如何にかかるとありますが、私たちはいつエネルギー源大震災に遭遇しても、家族の生活が営める態勢を整えておく必要があると考えます。

最後に、欧米諸国を有意義に訪問調査することができましたことを関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

(機械工学科16回卒)



米国カリフォルニア州Palm Springsの風力発電群と筆者

日本大学工学部に望む

助郡山地域テクノポリス推進機構 理事長 大 高 善兵衛

「日本大学工学部に望む」という題をいただきました。そこで、この機会に郡山地域テクノポリス構想への理解をいただくと共にテクノポリスと日本大学工学部との関係～現状と期待～について申し上げてみたいと思います。

(郡山地域テクノポリス構想の進捗状況)

1. 計画理念

郡山テクノポリスは、地域の文化・伝統と豊かな自然に高度技術産業の活力を導入し「地域経済の自立的発展」を図りつつ、産・学・住さらには、これらを補完・強化するための遊(教養、娯楽、余暇機能)・創(本社機能や研究所、産業支援サービス業など産業の頭脳部分)が有機的に結合した魅力ある地域づくりとして、21世紀を先取りする都市空間の創造を目指すものであります。

計画期間 1986年～2000年

2. 郡山テクノポリスの進捗状況

(1) テクノポリス推進の中核的事業主体については昭和61年3月に助郡山地域テクノポリス推進機構(基金15.1億円)が設立され、債務保証事業、技術振興事業(研修・指導、研究開発活動支援調査研究、普及啓蒙の各事業)、地域技術起業化推進事業、地域技術波及促進事業、頭脳立地構想推進事業を活発に展開している。(日本大学工学部との関係は後述)

(2) 研究開発機能、人材育成機能、情報機能の強化については、すでに清稜情報高校が開校、その後福島県ハイテクプラザの開設、日本大学工学部に情報工学科が新設されるなどの進展がみられる。福島県産業見本市会館(仮称)の計画も着実に進展している。

(3) 産学官共同研究については助郡山地域テクノポリス推進機構、日本大学工学部、福島県ハイテクプラザ等を中心に着実に成果をあげている。

(4) 基盤整備については田村西部、郡山西部第2、郡山西部第1、須賀川北部等の工業団地を整備している(取得、造成又は分譲中)

また、住環境の整備として郡山東部ニュータウンの建設や郡山市希望ヶ丘団地建替事業、須賀川駅前、事業を始め多くの事業が展開された。

さらに、平成5年3月に福島空港が開港した。

(5) 企業立地の状況と工業開発の目標達成状況

企業立地の状況

	平成3年	平成4年	承認前3年の年平均A	承認年以降の年平均B	B/A
全業種					
立地件数(件)	12	8	10.7	16.7	1.6
敷地面積(ha)	19.0	29.7	7.3	28.7	3.9
技術先進型					
立地件数(件)	0	1	4.7	3.3	0.7
敷地面積(ha)	0	3.0	3.5	4.7	1.3

工業開発の目標達成状況

(昭和55年価格)

項目	年	昭和55年実績 A	平成3年実績 B	平成3年目標推計値C	平成7年目標値D	B-A/C-A (%)
工業出荷額(億円)		4,928	12,300	11,373	15,407	114.4
工業付加価値額(億円)		2,163	3,564	3,498	4,170	104.9
工業従業者数(人)		38,827	46,217	46,991	50,334	90.5
工業付加価値生産性(百万円/人)		5.57	7.71	7.45	8.28	113.8
人口(人)		403,207	439,053	439,183	453,226	99.6

(郡山テクノポリスと日本大学工学部)

テクノポリスが目指すもの、それは高度技術に立脚した産業の育成であり、そのためには企業の研究開発や起業化活動を推進する体制が必要であり「学」の協力が求められています。郡山テクノポリスの場合、日本大学工学部への期待は誠に大きなものがあります。

現在、次の2つの事項に協力をいただいています。

1. 助郡山地域テクノポリス推進機構の運営

助郡山地域テクノポリス推進機構の役割と事業については、前述のとおりです。國分工学部長には当推進機構の最高機関である理事会の理事に就任をいただいております。各委員会や専門部会にも各学科の先生にご参加をいただき事業の企画や運営についてご協力をお願いしています。

2. 企業の研究開発への支援・協力

日本大学工学部で生まれた研究成果が企業に移転され製品化される事例も増えてきました。産学共同の研究も行われています。また技術相談や研究会、各研究室の見学や大学施設の利用、先生方と企業の交流会など多種多様な協力関係が生まれています。

さて、企業活動の国際化、海外進出などによる産業の空洞化、既存市場の成熟化などにより、経営をとりまく環境は厳しいものがあります。特に製造業では廃業率が開業率を上回り企業数は減少傾向にあります。

こうした中であって郡山テクノポリスの中核的学術研究機関である日本大学工学部に対する期待は益々高まるものと思われます。一つには大学内にある技術シーズの提供、そしてシーズを基礎とした技術開発段階での協力・支援であります。現在も協力をいただいているところではありますが、更なるご協力をお願いします。二つには、郡山地域の産業、環境、生活文化、医療・福祉、情報・通信、流通・物流、エネルギーなど、幅広い分野での提言・意見活動をぜひ、お願いしたいと思っています。三つには、郡山テクノ地域(産業)の情報化への指導、情報関連産業の育成などの支援をお願いしたいと思っています。

日頃のご協力に衷心からお礼を申し上げますと共に更なるご支援をご期待申し上げます。

工学部の入試制度

日本大学工学部広報担当 小野沢元久

今日、大学関係者の最大の関心事は、『冬の時代』と呼ばれる進学志願者数の減少である。人口構成より1992年を境に18才人口は減り続け、2000年には大学の進学者収容能力(67万人)の方が、1200人ほど上回り、更に2008年には、12万人ほど上回ると予想されている。加えて日本経済の不況、進学者の理工系離れ、若者の製造業離れなど、社会的要因も減少する方向に拍車をかけている。世界的規模で激動する技術革新は、文部省に「大学の設置基準」の改正を促した。この結果、各大学では、教育の個性化を目指して胎動が激しい。社会は、大学教育の動向を注視しており、最早や大学が、特殊な社会という認識は、許されなくなった。

本学でも、より高い社会的評価とより強い信頼を得るべく、困難な「自己改革」に取り組んでいる。すなわち、志願者減に対する効果的な対策、18才人口激減期に対する新たな大学のコンセプト確立などの準備を進めている。教授会では、数多くの論議を重ね本学の教育目標とその整合性を踏まえて、入試制度の改革を進めてきた。その基本方針を要約すると、

- 1) 多様な入試制度の開発により、多様な資質・能力を持つ学生を受入れ、キャンパスの活性化を図る。
- 2) 志願者の受験機会の拡大を図る。
- 3) 学業だけでなく、ノン・アカデミックな分野での多面的潜在能力も重視する。
- 4) 地域への人材供給源としての役割を果たす。
- 5) 永く友好を保つ高校との信頼関係を強化する。

現在、本学で実施している入試制度を下表に示す。この主旨に基づき、公募制の導入、指定校制における地域枠の拡大と学力試験の廃止、更に平成7年度一般入試では、従来の英・数・理3教科から英・数2教科入試へと踏み切りました。工科系大学としての入試科目から理科を削除することに異論なしとはしないので、ここに至った背景について述べる。

社会は益々多様化し、社会構造や産業構造のリストラを押し進め、中等教育や高等教育に対する社会的ニーズをも多様化させるに至った。文部省は、多様化に伴う社

会の要請に応えるため大学の設置基準の大綱化を図り、従来の規制を大幅に緩和した。これにより大学は自己責任体制で教育活動をする自由度が与えられた。幸い、本学は平成5年度に、日本大学としては初めて、情報工学科を設置し、既設5科と合わせ、高度情報化社会が求める『新しい技術者』を育成する教育体制が整備され『多様な教育』を推進する基盤を確立することができた。本学の自由度は一段と大きくなった。よって入試科目の設定では、以下の3つの要素を加味することにした。1つは教育の多様化と活性化である。昨今の理工系離れは、日本の産業界にとっても深刻な問題であり、文部省も理工系分野の魅力向上に関する懇談会を発足させ、真剣に取り組む姿勢を見せている。工系に理科の知識が必要なのは当然なのだが、これから育てるべき工系の人間像は、理科の知識の他に豊かな情操を持っているなければならないのである。知識は後刻教授することはできるが、情操は人が本来有している性質であるから教えることは困難であると云わざるを得ない。文系を志向する志願者に入学を許し、工系の知識を与えるのも、工学部の重要な役割となってきたのである。2つ目は、在学生女子占有率の拡大である。18才人口が減少する中で、女子も大学進学率は増加傾向にある、現在的女子占有率は約5%位である。今後、日本の技術がハードからソフトへと主力を移行しようとする中で、女性の感性を生かした発想が期待されている。3つ目は、本学志願者の併願の実情である。志願者の併願先は、工系のみならず、教育、芸術、医学の各系など多岐にわたっている。

以上が、2教科入試に踏み切った実情である。

入試制度は、本来いかにして学生を集めるかという術に終る制度ではなく、自ずから学生の集う大学創りを目指すものでなければならない。その意味でも制度に対する深い理解と認識のもとに、ソフト面とハード面の受入れ体制の充実を図る必要がある、同時に3万5千余名を越える校友組織を活用した学生確保の体制作りも今後の重要な課題である。

表

(工学部の入試制度)

入試区分	募集人員	時期	趣 旨	本学の求める学生像	選 抜 方 法
推薦入試	指定校制 140名 (14%)	11月	永く友好を保つ指定高校との信頼関係を維持する。※固定数の確保	成績が中以上で、人間的に優れている者。社会活動、クラブ活動で貢献した者。	面接・小論文 ◆高校教員の主観評価尊重
	公 募 制 60名 (6%)	11月	学業成績だけでなく、ノン・アカデミックな分野での多面的潜在能力を持つ学生の確保。	成績に拘らず秀でたものをもつ者。(特定科目優秀者、工学的センスのある者・社会活動、クラブ活動で貢献した者)	面接・小論文・学力試験(英・数)・内申書 ◆大学教員の主観評価重視。(一部客観評価)
	付属推入 230名 (22%)	1月	本学の教育理念を良く理解し、帰属意識の強い学生の確保。 ※固定数の確保	成績が中以上で、人間的に優れている者。社会活動、クラブ活動で貢献した者。	面接・小論文 ◆高校教員の主観評価尊重
一般入学試験	600名 (58%)	2月	理工系学部として、オーソドックスな学生を多方面から確保。	成績優秀な者。	学力試験(英・数) ◆客観評価
外国人留学生 (学生(帰国子女))	若干名	10月	大学の活性化並びに国際化へ向けての豊かで多様な学生構成を目指して。	本学で学意欲を持ち、国際感覚豊かで人間的に優れている者。	学力試験(英・数) ◆大学教員の主観評価+客観評価

学窓発信 1995

—若きエンジニアの育成—

土木工学科主任 中村 玄正



昨年、工学部校友会、日大シビル会（北海道）、埼玉県日本大学土木校友会、千葉県片桜工会に出席する機会がありました。それぞれの地域・職

域・社会で「土木技術者」としてご活躍中の校友の方々とは親しく接することができ、とても有意義な時を過ごしました。

国土保全や社会基盤の整備に関して構想を練り、計画を立て、設計し、建設する「土木技術者」の使命と責任—「土木」を支え、「土木」に生きる若い世代の育成が大学の使命でもありましょう。

一方、若い世代の将来認識の中で「理工離れ」、「土木離れ」を聞いております。「理工離れ」については科学技術庁や文部省で種々な施策を検討始めているようですが、「土木離れ」に関しては私達「土木」に携わっている者が何等かの手だてを講じていく必要があると思います。ことに教育の場にある大学こそ、幼稚園児・小学生・中学生・高校生等の若い世代に「土木」のあらゆる楽しさ、面白さ、可能性を知ってもらい、人生の選択としての正しさを訴える、最も重要な立場にあると思います。

日本大学の教員として、工学部土木工学科の主任として、いろんな機会を通じて若い世代に「夢のある土木」を理解してもらえよう、積極的に活動していく所存であります。校友の皆様のご理解とご支援をお願いし、また、社会人の立場から、学び舎にある後輩の学生諸君にご指導ご鞭撻頂くようお願い申し上げます。

—校友の皆様へ—

建築学科主任 大濱 嘉彦

ここ、4、5年、大学の在り方が大きく、激しく様変わりしております。日本における大学の歴史が始まって以来のこの激動は、1991年の文部省の「大学設置基準の改正」に端を発し、更に、18才人口の激減という「大学の冬の時代」の到来によって、弾みがついているように思えます。まさに、「大学の危機」と同時に、「大学の自由化時代」に突入したといえます。このような背景の下で、工学部でもカリキュラムの改正が行われて、建築学科でも、「構造・材料コース」と「計画・

環境コース」から成る2コース制が実施され、学生の個性を尊重する教育の試みが始まりました。

又、外に開かれた大学を目指して、工学部の最近の傾向としては、女子学生の受入れの促進、国際交流の推進と留学生の受入れの促進、産学協同による研究・開発の推進（テクノポリスへの貢献）、大学院教育の充実と社会人の受入などが挙げられます。しかし、このような新しい動きも、「大学の危機」を乗り越える必要があります。



いずれにしても、今日、大学自体、その経営面も含めて、大変な難局に直面しております。

このような時こそ、校友の皆様方との緊密な関係を維持し、21世紀を展望できる新しい大学像を求めて、この難局を乗り越えて行く必要があると考えます。どうか、この拙文をご理解の上、暖かいご支援をお願い申し上げます。

—学科の近況—

機械工学科主任

依田 満夫



校友の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

現在、当学科では25名の専任教員が教育と研究に当り、学生が興味と熱意をもって学問に取り組める環境作りと、実践的かつ創造性を養う教育の充実を目指しています。平成5年度に改正されたカリキュラムには、その目的に沿ったいくつかの特徴があり、1つには、固体の力学、熱力学等の力学系の科目に演習を設けました。これは演習問題の解決によって、より深く理解させるねらいがあります。また、3

年次からメカニカルサイエンス、環境・エネルギーシステム、情報・生産システムの3つの「ゆるやかなコース制」を取り、小人数の学生に、教育、進学・就職、学生生活等のより密接な指導・助言を行うことを目的としています。その一環として工場見学も計画しています。

卒業研究では、基礎から応用に至る幅広い研究が行われており、材料の強度、非破壊検査、水力式清掃機、ロボット、スターリングエンジンなどテーマ数は100に及び、各先生方のきめ細かな指導のもとに、1年間の卒業研究に取り組むことによって、学生は創造性と同時に豊かな人間性を養うことができるものと期待してい

近畿地方校友の皆様

阪神・淡路大震災では多大な被害を受けられたことと存じます。

衷心よりお見舞い申し上げます。希くは、旧に優りたる再興のあらんことをご祈念致します。

日本大学工学部校友会

会長 半沢 忠

ます。また40名の大学院生が学んでおり、研究成果は学会で発表されています。

受験人口の減少、理工系離れの問題に対処しつつ魅力ある学科を目指して努力して参りたいと思います。校友の皆様の一層のご指導、ご助言を戴ければ幸いです。



—「校友の皆様へ」—

電気工学科主任 松塚 勇

校友の皆様、御無沙汰しておりますが御壮健でお過ごしのことと存じます。

この度の阪神大震災で不幸にも被害に遭われた方々には衷心よりお見舞申し上げます。

4年ほど前に起きたバブルの崩壊、行き過ぎた円高、そして忌わしい大震災はこれまでの日本経済の順調な自信にあふれた発展に大きな風穴をあけた状況になっています。

この間、工学部も就職では苦戦を強いられましたが、皆様のお蔭で乗り切ってまいりました。また将来は18歳人口の減少により冬の時代を迎えると予想しております。

このようなことを述べてみますと希望あるものは見えて来ませんが、当工学部のある郡山市を見渡して、目に入る沢山の建物、道路、自動車、新空港等は皆校友の方々の属するエンジニアが造ったものかと痛感させられます。街を守るのも、復興するのもエンジニアです。エンジニアも送り出す大学も共に永遠でなければなりません。

ところで21世紀が間近ですので新しい技術が目白押しに登場して来ることが予想されます。このため大学と共同研究をして技術を進歩させ、守ることが必要になると思います。特許、論文は会社の技術を広めるのにも役立つと思います。大学も春を迎える原動力になると期待しております。

最後になりましたが校友の皆様の御健勝、御発展を心から祈ります。



—夢—

工化学科主任 尾崎 武二

200x年、秋のある日の朝、いつものように新聞を捻げると、また、某大学の学生募集停止の記事が目に入った。大学に勤める教員として身につまされる思いがする。1990年代後半から入った「大学冬の時代」の対策が遅れたのかも知れない。18歳人口の減少は入学生の定員割れをまねき、大学の財政基盤の根底を揺るがすことは判っていた筈なのに、多分、学力のある学生を育てるための教育方法の改革と併せ

て大学運営に関する諸経費の節約と切り詰めが甘かったのではないだろうか。我が工学部は早くから真剣に改善に努力したお蔭で、キャンパスは若返り、研究設備も充実して良い教育環境が整った。志願者が急増し、開設50周年記念事業も無事に終わった。学生達は緑多き広大なキャンパスで若きエネルギーを発散させ、青春を謳歌しながら勉学に励んでいる。新産都市郡山も活気に溢れ工場も増えて、卒業生の就職は良好で、毎年引っ張りだこの状態だ。社会人教育のため、毎週土曜日に開かれる教職員による公開講座は、研究成果を生かした内容で質が高く、分かり易いため、毎回満員の盛況である。この頃は入学希望者を連れた親御さんが見学を兼ねて全国から集まるようになった。工学部の序列を下から数えていた頃が返って懐かしい。教員の研究活動も優秀な入学生の若いエネルギーを得て活発であり、今年も既に3回の国際的学会が開かれた。我が工学部には冬がなく永遠に春が続くだろう。……正夢にしたい夢である。校友の皆様のご声援、ご指導およびご援助いただきたい……



—新しい情報工学科の近況—

情報工学科主任 岸本 陽次郎

情報工学科が工学部の地に開設されて2年が過ぎました。本年4月には22名の教員が揃い、人材の育成、学問体系確立への寄与および地域社

会への貢献を柱に、工学部の伝統に新しい1ページを加えるべく努力しております。そのうち、人材の育成に関しては、情報処理分野での実務処理能力と論理的な展開力の確立を目標にしています。そのために、1年生から学生1人1台のワークステーションを使ったプログラム演習、2年生からはコンピュータハード実験など、演習、実験には特に注力すると共に、情報コア科目の講義を中心に教員との接触を通じた論理的思考方法の習得に努めさせております。学問体系への寄与に関しては、情報基礎理論から情報要素技術および情報応用システムの研究など、幅広く取り組んでおります。地域社会への寄与に関しては、各種地域専門委員会への参加、情報処理講座の開催、共同研究などに努めております。

工学部正面桜並木沿いに建つ情報工学科棟には、最新のコンピュータやネットワークなど、恵まれた環境が実現されております。この環境から平成9年3月には約180名の若者が社会に巣立っていきます。多くの校友がおられることが、社会に出たときどれほど心強いことかということは、日頃から学生に教えているところで。校友の皆様には、これらの学年を2年後に暖かく迎え先導して戴くことをお願いして近況紹介とさせて戴きます。

校 友 短 信

土木工学科

◇近藤秀雄(2回卒、鴻巣建設(株))

早いもので卒業後40年、紅顔の美青年も?62才となりました。懐かしい母校を訪ねる会に招待戴きありがとうございます。たのしみに致して居りましたが、都合がつかず出席出来ず残念です。

母校の益々の発展と校友会の活躍を、お祈り致します。

(H.6.9.21受)

◇大越茂俊(13回卒、福島県土木部港湾課)

福島空港建設、空港管理に携わり現在(平6.4.1より)港湾課に勤務となり小名浜港ポートアイランドを着工

(H.6.8.11受)

◇小野賢一(15回卒、千葉県水道局)

引越しました、東京湾横断道路の千葉側の着岸点です。土木科の学生の見学会でも計画すればご案内致します。

(H.6.4.30受)

◇鎌田 徹(22回卒、関東ミネラル工業(株)群馬工場)

卒業後、土木業界と異質の耐火物製造販売業に従事しております。構造不況の中、大手の出来ないスキ間分野をねらいどうにか商売をしております。

(H.6.9.7受)

◇斎藤 謙(22回卒、(株)青木建設)

星越トンネル作業所(徳島県上那賀町)の現場代理人です。単身赴任でがんばっております。

(H.6.9.14受)

◇市川順昭(29回卒、(株)菅原組)

卒業と同時に入社以来13年、いろいろありましたが、日大出身の先輩後輩にも恵まれ、なんとか元気に現場でがんばっています。最近は業者と発注官庁との癒着問題等の為、入札制度も見直され、公共工事主体の建設業としては大きな波にゆさぶられていますが、みんなががんばっています。

(H.6.5.9受)

建築学科

◇江角彰宣(21回卒、江角彰宣建築設計事務所)

本年1月より故郷である出雲にて、新たな設計活動を始めました。これから今迄の貴重な経験を生かして建築及びその周辺の活動に心機一転、一層の精進をして優れた作品づくりに意欲を燃やしております。

(H.6.5.6受)

◇石原 豊(22回卒、(株)巴組鐵工所)

東京国際展示場東展示棟大屋根の鉄骨工事を行っています。

(H.6.9.28受)

(校友会の事務局へのお便りや、連絡などから)
無断で掲載いたしました。ご了承ください。

◇金子 真(22回卒、(株)竹中工務店)

“母校を訪ねる会”残念ですが仕事の都合で欠席させて頂きます。後輩諸氏の頑張りを期待しております。

(H.6.9.10受)

◇後藤 潤(22回卒、後藤建築設計事務所)

昨年東北旅行の際に卒業以外初めて母校を訪ねました。なつかしく大学時代を思い出しました。

(H.6.9.5受)

◇西島衛治(22回卒、熊本工業大学)

現在、熊本県の高齢者・障害者に「やさしいまちづくり条例」の協議会の顧問として会議の連続です。母校を訪ねる会は残念ながら出席できません。

(H.6.9.12受)

◇深堀潤司(22回卒、(株)長谷川工務店)

“母校を訪ねる会”欠席します。いつれ機会があったら訪ねます。学食で食事をしてみたいです。

(H.6.9.21受)

◇作田 積(22回卒、尾道技研(株))

“母校を訪ねる会”の案内、誠にありがたく厚くお礼申し上げます。この会のことは近隣の先輩方より聞いていて私達の番を楽しみにしていました。

(H.6.9.8受)

◇松本宣徳(22回卒、YM建築設計事務所)

建築学科第22回卒業生のグループで「建酔会」という同窓会を毎年11月末頃にやっており、同級生の懇親を深めております。(関東、東京地区)

(H.6.9.8受)

◇永田 進(22回卒、静岡県立静岡工業高校)

“母校を訪ねる会”に昨年出席させていただき感激いたしました。出来るならば10年ごとに参加出来るように又、広川先生等創設以来の先生にも是非参加してくれるよう校友会でも配慮していただきたい。

母校のますますの発展を祈願しています。

(H.6.9.5受)

◇大根田 守(22回卒、栃木県立宇都宮工業高校)

校友会事務局のお骨おりで同窓生に再会できる機会が与えられ感謝し、また楽しみにしております。

(H.6.10.1受)

◇原田純一(41回卒、東急建設(株))

社会に出てもうすぐ2年が過ぎようとしています。建設業界における日大OBの数の多さには驚いております、と同時に心強さも感じています。

(H.7.1.11受)

機械工学科

◇庄司雄一郎(7回卒)

勤続35年を期に、長年勤務した日立製作所を退職し夢であったボランティア活動を、と、思っています。

(H.6.9.28受)

◇滝口武志(11回卒、シャノン販売東日本㈱)

新設されたプラスチックサッシの販売会社で、関東地区を主とした拡販と刻々と変わるユーザーニーズに対応しております。

(H.6.9.22受)

◇相原茂良(13回卒、市光工業㈱)

4年半のアメリカ駐在任期を終え、昨年3月に帰国しました。

(H.6.5.25受)

◇二本好文(18回卒、コニカ㈱八王子生産管理部)

7年間ドイツ子会社BMMでの勤務を終え、帰国しました。最初、ハンブルグ飛行場に着いた時は業務に対する不安(会社設立の初期)で膝頭が震えましたが、7年間は過ぎてしまうと良い思い出であり家族にとってもドイツとフランスでの生活は良き体験となりました。

(H.6.5.6受)

◇野田道彦(19回卒、カシオ計算機㈱)

校友会報を読ませていただく時、20数年前の学生時代を思い出します。機会をみて母校に行ってみようと思う事しばしば……

(H.6.6.13受)

◇石坂邦雄(22回卒、カギのケー・アイ・ケー)

今年、会社を退社し独立しました。

(H.6.9.12受)

◇柿田佳邦(22回卒、アイシン精機㈱)

この夏尾瀬旅行の帰りに車窓から校舎を見ました。一瞬に学生時代のことが脳裏に浮かんできました。昔のことがなつかしく友人の顔がつつぎと…20年の時の流れの早さにおどろいています。校友会報で母校が年々先輩、関係者の努力によって充実している様でうれしく思っています。今後も引き続いて母校発展、校友の皆様の活躍をお祈り申し上げます。

(H.6.9.28受)

◇佐々木文得(22回卒、いすゞ自動車㈱)

本年5月に、リクルート関係業務で20年振りに母校を訪問しました。正門左手の情報工学科棟、情報研究棟の新築された校舎を見、さらに大きな発展を知り大変うれしく思いました。また女子学生が増えた事におどろきました。

(H.6.6.1受)

◇宮村則雄(22回卒、王子工営㈱)

苫小牧市に本社を置く王子工営㈱に勤務しております。昨年度は大蔵省印刷局に抄紙プラントを納入致しました。

(H.6.5.31受)

◇林 正明(22回卒、山洋電気㈱)

“母校を訪ねる会”はすばらしい企画だと思います。関係各位の配慮には感謝いたします。小生残念ながら今回は出席できません。次の機会を楽しみにしていますので御通知の程、宜しくお願い致します。

(H.6.10.1受)

◇平田浩昭(36回卒、㈱ユニシアジェックス)

校友会の益々の御発展を祈っております。本年度は一段と就職が困難の様子ですが頑張ってください。

(H.6.7.13受)

電気工学科

◇窪 章久(22回卒)

近年中に、家族で福島を旅行する際母校に立ち寄って見たいと思います。俊英寮はどうなっているのか……あの頃に戻りたいなあ、と思うこの頃です。

(H.6.9.19受)

◇敦沢正人(22回卒、光洋精工㈱)

“母校を訪ねる会”の案内状を首を長くして待っていたのに、仕事の都合で出席できないのが大変残念です。

(H.6.10.6受)

◇中村弘和(22回卒、市光工業㈱)

“母校を訪ねる会”に参加したいのですが、メキシコ出張の準備の為残念ながら出席できません。

(H.6.10.11受)

◇木村誠聡(33回卒、日本アイ・ピー・エム㈱)

現在、武蔵工大大学院にSpecle画像処理の研究の為通っております。会社にももちろん通っていますのでWeekendしか大学に行けません。

(H.6.10.19受)

工業化学科

◇渡辺冠孝(13回卒、佐世保赤十字血液センター)

昭和40年3月に卒業以降元気に働いております。その間一度母校を訪ねましたが、2年後に郡山の方へ出かける予定です。(合気道の演武会見学のため)

(H.6.5.14受)

◇蕪木 弘(22回卒、二本ビッグメント㈱)

現在、マレーシアのクアラルンプールに在勤中です。

(H.6.10.7受)

◇細野栄一(27回卒、前橋市消防本部)

高野操先生のご逝去心からお悔みを申し上げます。県内の消防署にも、本校の校友が数名在職している事が先日判明し、意を強くしました。

(H.6.5.6受)

◇二本孝佳(38回卒、吉田工業㈱)

この度社命によりYKKシンガポール社に赴任することになりました。微力ながら専心努力いたします。

(H.7.2.21受)



渡辺幸夫氏を悼んで

元会長 太田雄八郎

昭和28年3月日本大学第二工学部土木工学科を第1回生として卒業された渡辺幸夫氏は、平成6年8月25日心不全(肺)のため郡山市の病院でご逝去されました。享年64才でした。昭和28年4月福島県土木部計画観光課に奉職以来原町建設事務所所長、福島市建設部長、県土木部都市計画課長、いわき建設事務所所長、土木部次長、県建設技術センター、県住宅供給公社、県区画整理協会、それぞれの専務理事等を歴任されました。一方工学部校友会にあっては、昭和31年3月工学部校友会の前身である土木工学科校友会を設立発足させ、初代会長を務め、更に昭和33年5月には土木校友会を発展解消して新たな第二工学部校友会の設立に尽力され、初代会長に推されて校友会館の建設に情熱を燃やし、昭和34年5月に新築落成を見ると共に現在の校友会の礎を築いたのであり、その後再度会長に推され、会の発展のため尽力されたのであります。今日あるのも渡辺氏の功績の賜物であります。

渡辺氏は温厚誠実にして品行方正で責任感旺盛であり会の運営は勿論のこと勤務上でも常にリーダー的存在で人のため奉仕することを信条に誠心誠意ことにあたり、その的確な判断力と深い洞察力、強い信念と優れた実行力を持って校友会発展のためたゆまず努力されたのであります。このお蔭で今日の校友会の隆盛があると云っても過言ではありません。又持前の信条で県政の発展に尽力しその卓越した統立力と指導力は高く評価されておるところであります。尚県都市計画課長時代には今年開催される第50回国民体育大会福島国体のメイン会場である「あづま総合運動公園」の建設や都市計画街路事業の推進に尽力するなど都市基盤施設の整備促進に努める傍ら企画力を活し県都市行政発展に大きく貢献された方であります。このような優秀な人材を60才なかばで失うことは校友会としても又県としても誠に惜しんでも惜しみ切れず痛恨の極みであります。ここに生前に尽くされた数々のご功績に対し感謝の意を捧げると共に今後、我々は校友会の発展のため尽くすことをお約束し渡辺幸夫氏のご霊前に応える道と信じ哀悼の言葉とします。

合 掌

喪主 渡辺 美和子



菊池光子先生を悼む

化2回卒 後藤 尚

菊池光子先生は、平成6年8月31日肺ガンのためご逝去されました。享年63歳でした。先生は、昭和29年3月第二工学部(現工学部)の2回卒として卒業、更に学理の道を選ばれて、本学の工学研究科(現理工学研究科)修士課程、博士課程と進まれました。昭和34年4月母校に迎えられて、後輩の教育と研究指導に努められ、助教授、教授と昇任され35年間にわたり母校の教育、研究に尽力されてまいりました。この間、工業化学科主任補佐も努められ、常に学科の中心的立場で学科の発展に尽くされました。校友会では評議員として会の運営に寄与されました。先生のご専門は、天然有機化学で学会では、香料、テルペンおよび精油の分野に属され、度々国際会議で発表、この分野での権威でした。また、日本婦人科学者の一員としても活躍されておりました。先生の学問に対する情熱は、多くの教え子(校友)の方は体得されていると思います。先生は学生や私共教員に対して、師であると共に母として、時には姉としてご指導下さいました。先生は病床にあっても研究の成果を論文にまとめられておられました。学問に対する情熱を改めて学ばねばと思っています。先生の母校に残された業績は偉大であります。先生を失ったことは残念でなりません。先生ご意思に報いる努力を重ね母校の進展に邁進する所存です。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合 掌



外木有光先生を悼んで

機14回卒 依田 満夫

外木先生は、平成6年8月16日肺しゅようのためご逝去されました。享年80歳でした。先生は、昭和23年日本大学専門部教授として郡山に赴任され、以来40年学生の教育・研究指導に当たってこられました。特に先生の材料力学の講義は印象深く、各々の問題を懇切丁寧に教えられ、いつの間にか私共がひきつけられるような大変興味深い講義でした。

先生は在職中、日本大学工学部長、日本大学副総長の要職を歴任され、昭和62年勲三等旭日中綬章を、また郡山市文化功労賞を受賞されました。

最後に、21世紀に向け大学変革の時代に、微力ながら工学部の発展に尽くすことが先生のご恩に報いることであると信じます。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合 掌



柴田勝治氏を悼む

会長 半沢 忠

日本大学名誉理事長で日本オリンピック委員会(JOC)名誉会長でもあられた柴田勝治氏は、かねて病氣療養中のところ平成6年8月20日に日本大学医学部附属駿河台病院でご逝去されました。享年83才でした。葬儀は、日本大学葬として、去る9月16日東京・青山葬儀所で、日本大学関係者、スポーツ関係者、国会議員など1,700人が参列する中で、厳かに執りおこなわれました。同氏は若手県出身。昭和8年本学高等師範部を卒業され、同22年に校友会へ勤務、同42年校友会本部長、同44年理事、同45年常任理事、副理事長を経て同56年から平成5年までの4期12年間理事長を務めた。日本大学校友会の一翼を担う工学部校友会の活動にいつも深いご理解を戴きました。ここに感謝申し上げるとともに哀心より哀悼の意を表します。

合 掌

◇校友の母校での教員

平成6年4月1日付で昇格されました。

教 授 藤田 龍之 (土木14回卒)

原 忠勝 (土木15回卒)

大平 磨一 (電気16回卒)

助 教 授 藤田 豊 (土木20回卒)

今村 仙治 (機械17回卒)

森谷 信次 (機械19回卒)

専任講師 渡辺 英彦 (土木30回卒)

千葉 正裕 (建築31回卒)

平成6年4月1日付で新任されました。

助 手 百瀬 利明 (工化33回卒)

岡部 宏 (機械36回卒)

◇退職された先生

杉内祥泰(土)昭和29年4月1日～平成6年8月29日

定年退職

国分守行(建)昭和43年4月1日～平成7年1月17日

定年退職

伊藤英覚(機)昭和63年4月1日～平成6年10月12日

定年退職

土肥 博(機)昭和61年4月1日～平成6年2月12日

退職

宇野原信行(化)昭和27年4月1日～平成6年9月9日

定年退職

高木 昭(化)昭和26年9月26日～平成6年3月31日

退職

向井利夫(化)昭和62年4月1日～平成6年3月18日

退職

富樫敏男(情)平成4年4月1日～平成6年1月13日

退職

西本勝之(一)昭和24年1月15日～平成6年3月10日

退職

山村 敬(一)昭和63年4月1日～平成6年12月13日

任期満了

大学院博士前期課程への社会人特別選抜制度の御案内

日本大学大学院工学研究科では平成6年度から博士

前期課程への社会人特別選抜制度を導入しております。これは社会人として2年以上職務についておられる方が大学院への入学を希望する場合、一般の志願者とは異なり、学力試験を免除し、面接による口述試問と書類審査のみで選考されるものです。就職された方が大学院での研究・勉学を希望する場合には有利な制度です。

○受入れ人数：土木工学、建築学、機械工学、電気工学、工業化学の各専攻若干名

○選抜方法：口述試問と書類審査

○出願資格：入学時点で2年以上社会人としての職務歴を有する者で、所属長の推薦を受けた者

○選考時期：9月と2月の年2回

詳しくは教務課までお問い合わせ願います。

◇大学院工学研究科だより

平成5年度大学院設備拡充費

「開水路流れにおける組織構造の検討とその制御による水工学への応用」木村喜代治教授。

3次元光ファイバーレーザ流速計システム一式で、経費は34,500,000円。

「建築材料の耐久性」大濱嘉彦教授。温度履歴耐久性試験機一式で、経費は33,120,000円。

〔事務局便り〕

第15回母校を訪ねる会

日 時 平成7年10月22日(日)(予定)
対 象 第3回卒業生(昭和30年3月卒業)
第23回卒業生(昭和50年3月卒業)
前日同級会など開催され多数出席されるようお待ちいたします。

校友会報 第58号

発 行 所 日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号 963-11
電話番号 (0249)44-1327
振替講座番号 郡山5-1990
発行部数 39,000部
発行日 平成7年3月1日
発行者代表 会 長 半 沢 忠
編集者代表 事務局 長 橋 本 寛